2008年度
東京外国語大学
総合文化研究所
活動報告

講演会

「ドストエフスキーの現代性――『罪と罰』から『カラマーゾフの兄弟』」
7月3日　亀山郁夫

「Between East and West」
10月2日　アン・アプルボーム（作家）

「American Romance: Hawthorne's Polarities and Delillo's Particles」
12月3日　Samuel Coale（ウィートン・カレッジ）

「Connecting the 19th Century with the Contemporary」
12月13日　Samuel Coale（ウィートン・カレッジ）
鷲津浩子（筑波大学）
加藤雄二

「ロシアを語る――ロシア的精神とは何か？」
1月28日　佐藤　優

「カンボジアの影絵芝居」
2月4日　福富友子（スバエクの会）

シンポジウム

「グローバリゼーションの空隙――文化と周縁」
1月29日
福島富士男（東京都立大学）
都甲幸治（早稲田大学）
沼野恭子
柳原孝敦

レクチャー・コンサート

「「チェオボン」が奏でる森」
10月14日
「チェオボン」・虫明悦生（京都大学）

「Headhunters Music of Sarawak, Borneo」
11月17日
ランディ・レイン・ルーシュ（作曲家）

編集後記

本号では〈日本〉特集をお送りする。近年村上春樹をはじめとする日本文学への関心と需要が広く海外でも高まってきていると同時に、リービ英雄や芥川賞を受賞した揚逸のように、日本語で表現する外国人作家も珍しくなくなり、「日本語文学」というべき領域が次第に確立されつつあるようである。もっとも「日本語文学」自体は、戦前、戦中の満州、台湾、朝鮮といった植民地的空間ですでにもたらされていたものであり、日本の植民地主義の産物であった表現の領域が、新しい位置づけで浮上してきているのは興味深い。

本特集ではその〈国際化〉の担い手たるカズオ・イシグロや多和田葉子といった先端的な作家たちが、多彩な執筆者によって論じられている。それに加えて、現在よりも切迫した〈国際化〉の要請に迫られていたともいえる明治期の文化状況にも光が当てられている。日本文化の近代を概観するに足る、充実した特集となったのではないかと自負している。

もちろん文化の国際交流は近代になって始まったわけではなく、周知のように、一九世紀後半には葛飾北斎らの日本の浮世絵がヨーロッパの画家たちに強い影響を与えていた。こうした相互の摂取によって文化表現の可能性が深められていくことが、今後ますます期待されるところだが、今号の表紙ではその交流の端的な例ともいうべき、安藤広重の浮世絵とそれを模写したゴッホの絵を重ね合わせてみた。

今号の編集では教務補佐の大塚ちはやさんをはじめとして、多くの大学院後期課程の院生のみなさんのお世話になった。あらためてお礼を申し上げたい。

（柴田勝二）

Trans-Cultural Studies No.12
総合文化研究 第 12 号

2009 年 3 月 27 日発行

責任編集　吉本秀之

編集スタッフ　岩崎理恵　大塚ちはや
小野寺菜穂　古川哲

発行　東京外国語大学 総合文化研究所
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
電話　042-330-5409
Fax　042-330-5410
Web　http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ics/
e-mail　ics@tufs.ac.jp

印刷（株）平河工業社
東京都板橋区中丸町 30-3